



県内で暮らす20代の

私たちも時代を経て大人への階段を上つていく。この時期を、移行期（トランジション）とも言う。

この時期は、進学や就職などで生活環境も変わる。親元を離れ、1人暮らしをする若者もいる。アルバイトでお金をためて旅行したり、趣味や活動に没頭したりすることもあるかもしれないが、移行期にさまざまな人と出会い触合うことは、本来誰もが経験できてほしいものである。

では、人工呼吸器や経管栄養などの医療的ケアが必要な人たちはどうだろうか。

も、18歳以上の医療的ケア者

2016年に県からの委託

が移行期になったら、親は眞

長)

(NPO法人うりづん理事

自立支える第二者育成を

社会人となつたAさんがあ

三者がいないからである。

自立とは自己選択などと

立なんだよ」と。

から出ることが難しくなる。

障害者のデイサービスである

女性は教えてくれた。医療的

のほとんどは親と暮らしていく。病気や障害のため働くことも難しい。

Aさんは、気管切開をしていてフルタイムで働いている。知的障害も身体障害もなく歩ける。地元の小学校に入学した時は、行政が看護師を学校に派遣し、親は滞在しなくてよい画期的な仕組みができる

増していく。移行期の若者はもよい画期的な仕組みができる。その後、高校、大学にも合格し、就職試験にもパスした。

「ずっと」「最期まで」「体力の

続く限り」「自分が死ぬときと一緒に連れていきたい」という回答があった。どうしてここまで親は考えるのか。そ

れは、自分の代わりになる第二者育成をめざすものである。障害者のデイサービスである

障害者には医療的ケアに関する加算がなく、事業所としては人員を確保して赤字覚悟で受け入れる厳しさがある。自宅で介護ができるヘルパーは極めて少ない。卒業後も少ないと

でわが子を抱えるのは体にこだえる。卒業までは毎日通う場所があったが、その後は家

で行つた研究で「いつまで介護をしたいですか」と医療的ケア児の親に尋ねたところ、「ずっと」「最期まで」「体力の

続く限り」「自分が死ぬとき一緒に連れていきたい」という回答があった。どうしてここまで親は考えるのか。それは、自分の代わりになる第二者育成をめざすものである。障害者のデイサービスである

第三者的な介護はプロに任せて、

子どもの愛情を注ぎながらも、自分がやりたかったこと

をする時間があつてよい。

25年ほど前、宇都宮市に住

むある女性の家を訪問した。そこには暮らしを支えるヘル

パーが毎日出入りしていた。

その女性が言つた。「自分

は歩くことも洋服を着ること

もできないけど、もし今日、

ピンクの服を着たいと思って

着せてもらえたなら、それは自

立なんだよ」と。